

能能

發白子女志題

下



俳諧發句千五百題集卷の下

一事庵史梁編

七月三部

文月

文月やふりも帯の巻も似也

本世派

文月や一人おわき娘は子

其角

秋の雨くもる文月花はるる

良徳

文月や人の中りりて天は川

寛松

文月花うけや扇の下あこり

素梁

文月やゆりよはてん花はる

若三

文月や金魚おぼろの魚行方

梅室

と秋

久月や雲のうらみき秋のそ  
 久月や秋の祝はるるさくら  
 粟ぬや唐土わらうけさ秋  
 帷子の庭もわらやけさ秋  
 けさの秋花とて人よさふ  
 夕夕よ追つみれけりさ秋の秋  
 糸とそまきうらみぬけさ秋  
 一寸の星を晴くけさの秋  
 一二寸はあも強うけさの秋  
 糸は子鳩のけんくけさ秋  
 鏡のうらみさや清のけさ秋

露が 清き 露川 白 暁臺 暮村 某年 氷治 蒼帆 一宵 梅令

星

星合や身はるるさくら  
 うらみかる抱ぬらうらみ星合  
 星合や月を今宵と輝くうら  
 星と音きくの抱ぬさくら  
 抱ぬ星のうらみ抱ぬさくら  
 星合や一人をむ川むうら  
 星合やさくら抱ぬさくら  
 のうらみ抱ぬさくら  
 星合や抱ぬさくら

夷則 素行 雉之 其山 蒼帆 招軒 月居 作憲 招竹 色淵 抱像

星 近 笛の葉より枕のけりも星近の  
 海鳥とけりて酒の玉星近の  
 戯きり扇海人星近の  
 少んとも笛のまきりて星近の  
 知りては川をわたりて星近の  
 別 星 夕星今もあまうりて星近の  
 立 琴 立琴や秋の志人と虫の志  
 立 琴 や 三千人の志人  
 立 琴 や 秋海棠の葉とつれ  
 いとくは深き糸の糸ひくれ  
 ねとくもむねの糸ひくれ

其角 玄来 晚臺 一茶 暮琴 曉臺 可風 希園 乙由 松舟 立圃

燈籠 雨よりけりて星近の  
 立 燈籠 ひらけ物とけりて星近の  
 立 燈籠 ひらけ物とけりて星近の  
 つふねれはねれりて星近の  
 捲く居てて星近の  
 切 籠 月一灯を切籠とて星近の  
 白骨の切籠とて星近の  
 立 籠 とて星近の  
 行 籠 とて星近の  
 類よりけりて星近の

手籠 千那 峯雪 波同 素行 粗文 木園 完来 一具 露泉 左琴

持待

聖を新し馬廻宿の物苑に

手結

せつふのねんそんねんげん

釣雪

せつふのまきせつふの西ゆ

冬村

せつふのやむらひの物苑に

標立

せつふのやむらひの物苑に

野風

せつふのやむらひの物苑に

五明

せつふのやむらひの物苑に

杜若

せつふのやむらひの物苑に

梅窓

せつふのやむらひの物苑に

如雲

せつふのやむらひの物苑に

一映

せつふのやむらひの物苑に

去來

躍門

茶

年よりの丹精足

一映

蓋月

蓋の月影に

聖物

そとに影を

季由

つらとて

一具

あまの

士朗

ふとつと

可都

素心

楓園

草の葉

槐堂

力あり

大河

そとに

有石

おやう

宗古

灯籠

卓雄



秋涼一人物土草能草能  
 草也也秋涼人形手抄歩行  
 虫の言よ山を控へり草乃也  
 虫を馬くおくくや草能也  
 降ききくや草能手抄歩行  
 まんの草よ山を控へり草能也  
 草也也や婦人形手抄歩行  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也

風國  
 支考  
 甲乙  
 蒜少  
 棟実  
 槐堂  
 吟雲  
 宗古  
 洪我  
 棟民  
 鬼貫

秋

秋涼一人物土草能草能  
 草也也秋涼人形手抄歩行  
 虫の言よ山を控へり草乃也  
 虫を馬くおくくや草能也  
 降ききくや草能手抄歩行  
 まんの草よ山を控へり草能也  
 草也也や婦人形手抄歩行  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也  
 草よ山を控へり草能也

仁里  
 卷机  
 寿母  
 吉雲  
 芝碩  
 吉風  
 子愛  
 月庭  
 葵友  
 士朗  
 月居

秋

木槿

花をさくくしは船のさくくは花のさく  
 花本槿裸わく人のわくくくく  
 本槿花むえんがくくは花のけり  
 おくれくくは本槿の花のみくれ咲  
 川きや本槿咲くくくくく  
 菊さくくは花のさくくは本槿の那  
 さくくくくは花のさくくは本槿の  
 花汁桶くくくくは花のさくくは  
 おくれくくは花のさくくは本槿の  
 さくくくくは花のさくくは本槿の  
 咲くくくは花のさくくは本槿の

梅室  
 花さく  
 観多  
 木芳  
 北枝  
 嵐蘭  
 松風  
 菊さく  
 梅室  
 而后  
 波同

情吟 鯛

さんあふの一日くくは鯛の  
 日くくくは鯛のさくくは鯛の  
 日くくくは鯛のさくくは鯛の  
 ひくくくは鯛のさくくは鯛の  
 ひくくくは鯛のさくくは鯛の  
 日くくくは鯛のさくくは鯛の  
 日くくくは鯛のさくくは鯛の  
 年甲甲日くくくは鯛のさくくは鯛の  
 さくくくは鯛のさくくは鯛の  
 鯛のさくくは鯛のさくくは鯛の  
 ひくくくは鯛のさくくは鯛の

護物  
 さく  
 涼帝  
 弥五郎  
 曉臺  
 和戎  
 若白  
 白雄  
 左武  
 文子  
 鬼貫

虫



猶あそむにけむらひをそよむ外虫の春  
 夢さる程芭蕉まじりて出乃春  
 かくむしりの中人さしめ馬乃鼻  
 虫たたりや聴て抜つて新小踏  
 月清くそと虫ありしの下草のれ  
 虫たたりや道ゆくそと虫の返りて  
 けむらひの虫のまきかきありし水  
 虫たたりや春のちかき推島  
 うつらねやかりまじりてそと虫の春  
 花ぬけの虫の居る危持佛堂  
 虫たたりや春のちかき推島

貞室  
 許六  
 道彦  
 兼美  
 園更  
 左磯  
 湖山  
 健翁  
 馬月  
 寸長  
 秋室

以

春の柳をそよむそよむそよむそよむ  
 手揉むそよむそよむそよむそよむ

蜂

蜂や春を飛つてあそむ蜂柳  
 蜂や春を飛つてあそむ蜂柳  
 蜂や春を飛つてあそむ蜂柳  
 蜂や春を飛つてあそむ蜂柳  
 蜂や春を飛つてあそむ蜂柳  
 蜂や春を飛つてあそむ蜂柳

虫

虫は春の柳を飛つてあそむ  
 虫は春の柳を飛つてあそむ  
 虫は春の柳を飛つてあそむ  
 虫は春の柳を飛つてあそむ  
 虫は春の柳を飛つてあそむ  
 虫は春の柳を飛つてあそむ

嘯堂  
 碧山  
 北枝  
 孤屋  
 泥花  
 空徑  
 谷水  
 小卜  
 田舎古  
 田舎  
 守貞

飛鳥のついでに日暮るる雲の影

籬原

十里行舟の影は正夜にけり

梅室

端

端の影を流るる石のうへ

若中

端の影を流るる石のうへ

河内

智の影を流るる石のうへ

石后

端の影を流るる石のうへ

高野

端

道の邊に小舟の影を流るる

橋本

端

川の邊に小舟の影を流るる

急光

端

舟の影を流るる石のうへ

獲物

端

舟の影を流るる石のうへ

雲集

端

舟の影を流るる石のうへ

虚白

端

舟の影を流るる石のうへ

赤土

舟の影を流るる石のうへ

舟池

舟の影を流るる石のうへ

梅井

舟の影を流るる石のうへ

乙

舟の影を流るる石のうへ

遠去

舟の影を流るる石のうへ

遠去

舟の影を流るる石のうへ

杜鰲

舟の影を流るる石のうへ

梅室

舟の影を流るる石のうへ

若中

舟の影を流るる石のうへ

系

舟の影を流るる石のうへ

舟

稲妻やあつぬきをねむらう  
 稲妻や活砂のまの言 新  
 いまのまや新ふまよつ光  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 いまのまやうと息合ひも一の太  
 稲妻を急よ、まのむく存を、うた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた

江月  
 糸格  
 百也  
 為少  
 籍彦  
 淡系  
 松竹  
 土芳  
 越人  
 古抵  
 画紙

稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた  
 稲妻ねむらううらへ清きや雲やうた

氷谷  
 山骨  
 蝶夢  
 枝肉  
 西誓  
 小圃  
 完伍  
 席上  
 乙良  
 葦琴  
 丁酉

利

試法

明く戸は露れぬるや千尋の露  
よる千尋の露 遠くさうり 挽き出さ  
るをぬるく世に 露にぬる露に  
出る露にさす所は かく仕居られ  
おれしや千尋の心のまはる色ゆ  
きく露や冷ますより 露はくく 垣  
を露のまうり 露にけりし ねに  
出る露や ねに ねに 露のあ  
りて 露や かくのまはる露の  
白浪のうき かくのねに ねに  
ねに ねに ねに ねに ねに

赤藜

其山

梅倉

赤茶

乙二

苦屈

万難

赤文

一茶

摺堂

可部里

八月の部

八月

八月や 翔たすを山とく

八月のく 暑く 赤らん

八月や 日向 2 列を ねに

八月や 二日の 月を かく

八月の 山を ねに ねに ねに

八月の 山を ねに ねに ねに

八月の 山を ねに ねに ねに

去来

括集

浸

千字

李堂

丁心

素行

葉月

大

ハ 綱

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

南枝

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

許六

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

乙由

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

樽良

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

士朗

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

月庭

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

庚年

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

白雄

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

雲架

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

雲洞

ハ綱子遊のきき 綱子遊のきき

山唐

五 月

五月とけり 柳のきき 五月のきき

斗入

夕 月

夕月とけり 柳のきき 夕月のきき

斗入

待 宵

待宵や流浪のきき 待宵のきき

惟然

待宵や流浪のきき 待宵のきき

素堂

待宵や流浪のきき 待宵のきき

支若

待宵や流浪のきき 待宵のきき

教白

待宵や流浪のきき 待宵のきき

乙良

待宵や流浪のきき 待宵のきき

南枝

待宵や流浪のきき 待宵のきき

手鞠

待宵や流浪のきき 待宵のきき

道夫

待宵や流浪のきき 待宵のきき

一草

結膏や月代それと厚世久く

二信人

名月

名月や他をめぐりて秋もはる

た巻紙

名月と麓のまゝや田路くり

全

名月や冬はくるとま川の舟

其角

名月や居海吾とと顔加り

全

名月や海と柳も山もふんま

去来

名月や車きく山は馬家

丈草

名月や柳は枝をえくく

卷空

名月や煙遠りあの人

全

名月や志の如きのがあけ

望披

名月やけくるとくくと林のれ

支考

立初月

立初月中国は門をき信

立初月

月

月 月 月 月 月 月 月 月 月 月

万和

山をききて月をききて月をきき

越人

大いなる女はけりて月をきき

許六

招きけの子月をききて月をきき

露川

山をききて月をききて月をきき

暁臺

まきけの月をききて月をきき

士朗

まきけの月をききて月をきき

櫛堂

まきけの月をききて月をきき

永年

まきけの月をききて月をきき

子翰

まきけの月をききて月をきき

湖山

庭は月を同左草紙一  
元舟とて味也人の鳴月也此  
流をけりて夕に昨言を山は月  
宿をれハ夕と出さく一浦の月  
行をまけりて夕言を夜破の月  
明くても夕言を一紙く月也此  
鏡をけりてあけりて月の舟  
二階の夕言けりて夕言を臺所  
あけ海や月言の重の夕言一  
白鏡をけりて夕言一山乃月  
夕言や夕言を夕言の夕言の夕

暮村  
五藤  
完位  
沙路  
為才  
守夫  
屋敷  
井梧  
梅令  
鶴年  
波岡

子楯

中楯

子楯の夕言草紙一紙を宛てし  
は夕言の夕言交り楯や早楯一紙  
子楯の夕言楯も紙を宛てし  
紙も夕言子楯も夕言を宛てし  
子楯の夕言楯の夕言を宛てし  
引き夕言を宛てし楯の夕言  
夕言を宛てし夕言楯の夕言  
夕言の夕言楯の夕言の夕言  
楯の夕言の夕言の夕言の夕言  
楯の夕言の夕言の夕言の夕言  
楯の夕言の夕言の夕言の夕言

社  
突伍  
道彦  
溶々  
夕楯  
赤月  
乙由  
路通  
峯寺  
其角  
永保

近屋上かれの橋をんる小窓えん  
橋のけりくちよさよたふねう那  
穂のけりくちよさよたふねう那  
一株もさびりあきまや稲の出来  
稲のまね風の早し橋のまね  
わささよんゆるくちよた橋穂のり  
ちよさよんゆるくちよた橋穂のり  
ほりくちよさよたふねう那  
稲あめくちよさよたふねう那  
稲あめくちよさよたふねう那

月意  
椛二  
四号  
嵐  
那泉  
森六  
子権  
玄子  
椛  
祥木  
波同

新花

子のまよ新花のりくちよ  
新花のりくちよたふねう那  
新花のりくちよたふねう那  
新花のりくちよたふねう那  
鬼灯のりくちよたふねう那  
鬼灯のりくちよたふねう那  
鬼灯のりくちよたふねう那

雁来紅  
鬼灯のりくちよたふねう那  
鬼灯のりくちよたふねう那  
鬼灯のりくちよたふねう那  
鬼灯のりくちよたふねう那  
鬼灯のりくちよたふねう那  
鬼灯のりくちよたふねう那

陽  
椛二  
菅地  
寸長  
ちん  
春人  
曰人  
素行  
林曹  
一鈞  
史那



風呂新火の籠を纏ふ如葉勢以  
 秋海棠 秋海棠西の紅を色上吹上げり  
 蒼飛く秋海棠紅を色上吹上げり  
 秋海棠 其葉を河を所抄ひ  
 換之けと葉紅吹上如秋海棠  
 梅在花 志ましと如温候にその梅在花  
 ひつろまらけおくたり梅在花  
 朝夕まらんく是なり梅在花  
 鴨上戸 雨風の才と鴨上戸の那  
 葉花 碧油くむ小家の境や葉花  
 本履ぬく情を生けり葉花  
 本赤

其の如 志ましと如温候にその梅在花  
 日和まらけおくたり梅在花  
 梅在花 志ましと如温候にその梅在花  
 朝夕まらんく是なり梅在花  
 鴨上戸 雨風の才と鴨上戸の那  
 葉花 碧油くむ小家の境や葉花  
 本履ぬく情を生けり葉花  
 本赤

子粉 確粉 貞粉 茶露 送夫 一經 玉翠 際榮 護物 赤木 芝石

葛

正葛お 松次倒は 田家相  
 も平くくく 静るは 葛のま  
 くひのむ 白龍まに いらかしくん  
 けくくく かんく かりけり 葛はま  
 形 終あるまのく 照くく 静るく  
 子 狐はかくれ 鳥はく 静るく  
 多くあるまのく かんく 静るく  
 間引菜 百引は 露はく 葛はく  
 写引菜 一 秋く 山力家  
 本城前 長はま 三日月 相欠 本城前  
 葉 龍は 舞下 光く 葉はく

史 郎  
 山 庄  
 通 南  
 桃 年  
 一 宵  
 一 宵  
 知 足  
 朱 兵  
 表 方  
 巨 探

鳴子

林くく 鳴子く 鳴子く  
 世も人まのく 鳴子く  
 落く 鳴子く 鳴子く  
 洞く 鳴子く 鳴子く  
 静く 鳴子く 鳴子く  
 冷く 鳴子く 鳴子く  
 高く 鳴子く 鳴子く  
 奥く 鳴子く 鳴子く  
 山子 鳴子く 鳴子く  
 志く 鳴子く 鳴子く  
 居風名の 下く 鳴子く

士 郎  
 他 若 嘉  
 子 路  
 由 誓  
 一 宵  
 南 枝  
 昔 居  
 仙 危  
 去 来  
 惟 然  
 文 学

新よもろくへ 朽ぬる 葉山子丸  
 並つゝもさすの 葉山子丸 ね烟  
 うけり南がくつて めくつて 葉山子丸  
 隣田より 葉山子丸 湯一けり  
 細くもろく 葉山子丸 三月り丸  
 まくへ 病る 葉山子丸 巻けり 物仲  
 出さぬあつて 葉山子丸 まくへ 病る  
 吹あはれくつて 葉山子丸 つまへ 葉山子丸  
 雨ふれかへくつて 似る 葉山子丸 子  
 まくへ 葉山子丸 年々 七千二二の 舟  
 まくへ 葉山子丸 一あつて 葉山子丸

正秀  
 桃乃  
 赤葉  
 葛葉  
 路芥  
 其山  
 白根  
 梅室  
 乙二  
 蕉雨  
 寸長

村の夢

鶉

風は秋ありし 秋ありし 林のま  
 桐は木も 鶉はくあつて 堀り月  
 ことのあつて 鶉はくあつて 鶉はく  
 鶉はくあつて 鶉はくあつて 鶉はく  
 鶉はくあつて 鶉はくあつて 鶉はく  
 西へくあつて 鶉はくあつて 鶉はく  
 日影もあつて 鶉はくあつて 鶉はく  
 村へ 鶉はくあつて 鶉はくあつて 鶉はく  
 ちへくあつて 容易くあつて 鶉はく  
 畑へ 鶉はくあつて 鶉はくあつて 鶉はく  
 川へ 鶉はくあつて 鶉はくあつて 鶉はく

東風  
 ちへく  
 支考  
 湖山  
 蝶原  
 風朗  
 波同  
 由之  
 田吟  
 暮我  
 白根

入おの種甘き里中へくさる  
 托のうきさねわらき貞の勢ふん  
 評 燕 わく尻もあまふん 陰てそこのを  
 乙々も法書お大熱くうう  
 於戸くく人とわくお乙々も非  
 綿 荏 仲山よ来て遊むや 綿 荏  
 何事かしく隣色えまぬ 綿 荏  
 さあしくとくさるつや 綿 荏  
 遊くくく面白かぬや 綿 荏  
 綿 荏 罪をまもあれぬさき  
 そのまもをたぬ九山田は綿をまも

梅室 惟草 涼傘 其角 窓松 鹿白 菰亮 松什 也誰 梅室 備物

鹿

北岨岨や町をうち越鹿の音  
 鹿りくやとくと修打まうのあと  
 乃山ねねをえんせけり 鹿の音  
 於鹿の方さひさく一筆ね極  
 鹿すくすけりともやう羊鞋うれ  
 鹿すくや二足三足はたまうり  
 鹿押をむきあく杖也鹿の音  
 さけりく戸を押えけりや鹿の音  
 ぬれ鹿二つよ集くすえけり  
 鹿の音 油まらんくすえけり  
 けくすえけり鹿の音 ぬれ鹿の音

大子 鹿野 知是 許六 子格 知凡 里人 南枝 其流 吹鹿 狩人

小男若の麻は夏迄以て往來ハ  
木をふむ言しやう若の若  
若の若の若の若の若の若の若  
唐の唐の唐の唐の唐の唐の唐  
思ひま衣折屋は唐の唐の唐  
折あし口しつ唐の唐の唐  
若の若の若の若の若の若の若  
若の若の若の若の若の若の若  
唐の唐の唐の唐の唐の唐の唐  
唐の唐の唐の唐の唐の唐の唐  
唐の唐の唐の唐の唐の唐の唐  
唐の唐の唐の唐の唐の唐の唐  
唐の唐の唐の唐の唐の唐の唐

一具 大梅 他高 南此 閑正 号村 羽人 晚春 三卷 布拍 夢之

乃

雨をさ川のうねりや乃の乃  
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

一法 味此

九月乃部

九

九月 山とみとつまのり九月の那  
あつたま九月日和や教の思  
備者も夕暮終り九月のれ  
まもつらありし九月の那山か  
田もゆけを終りかつる九月のれ  
手折しやう二日の入九月の那  
舞のやせき屋をく九月のれ

宇南 水魚 石土 西誓 素鹿 子猪 千号

秋

長月

長月やあゆみまじし小田に鶴

万和

長月

長月能歌、甲知つたけり

万籟

長月

長月の法ありあやし、舟の星

良徳

長月

長月や日能居くつし、板底

南枝

長月

月能秋の意を、志し、辰能離

平心

長月

志つし、し、九宮多形、辰の離

南枝

長月

けし、く、ま、く、く、辰能離ひふ

平波

長月

離りも、意のきせ、く、是也、し、勢

護物

長月

意、能、意、や、意、く、た、れたる、皆能意

之也

新酒

松の葉と、お、葉、し、け、く、く、新酒を

諸九

濁酒

お、り、り、古きを、酒、や、濁り、酒

百明

木綿

巾着、海、の、き、ま、う、く、く、敷、を、く、人

伯光

木綿

甲、を、今、飾、新、く、く、き、日、お、た

荻方

巾着

け、く、平、や、白、紙、を、ま、け、て、帰、る、際

月夜

木綿

木、飾、り、伊、駒、の、く、ハ、丙、ろ、く、き

其角

小娘

小、娘、の、飾、し、く、袖、お、く、れ、け、り

泥足

草鞋

草、鞋、に、推、え、さ、き、り、く、後、れ、け、を

尺牘

推

推、の、意、よ、さ、う、く、あ、あ、く、く、推、し、其、氏

其角

栗

生、栗、を、搦、り、つ、め、つ、山、路、に、那

其角

絶

絶、栗、能、意、く、く、淋、く、秋、く、山

其角

穂粟やひしりくさちけり物さる  
 扇うさぎあけぬや粟なりは  
 落粟やゆぬきり星月秋  
 粟ひらけて居き子れも  
 固 粟 固 粟乃落て飛けり石佛  
 ちよとる市と人粟の落しけり  
 鳴りあふ山鳩寒し一掃の毛  
 秋そよよ日和くさく人掃の毛  
 日あふりの掃やふきの掃  
 掃利とほの掃り了世良の那  
 掃粟のいとまをひる月秋に  
 一掃 南枝 幸方 七世瓜 山内 文草 越人 史那 芹舎 云何人 一掃

ひつち田やゆぬりて馬のみ  
 ひつち田やゆぬりて馬のみ  
 冬 待 冬をま川多友打し一掃  
 秋 秋や菊もせんつうれ家  
 秋や洲邊ぬきあふものを  
 秋の四五りよきもの秋に  
 秋やさきく人をほやし  
 秋のちり星の掃り那  
 秋や縄きれの秋敷はね  
 秋や何まけぬ雨のちり  
 秋をねれやうり掃り  
 一掃

以秋を川子能言り尼かたり  
 以秋や早ももく〜縁能人  
 以秋や盲女能之海人馬在能頃  
 以秋や秋を能く〜秋能海能言  
 以秋やよ能衣能〜秋能人  
 以秋や切〜八物を能く〜  
 以秋を尾能〜さ〜  
 以秋や能〜  
 以秋や能〜  
 以秋や能〜  
 以秋や能〜  
 以秋や能〜  
 以秋や能〜  
 以秋や能〜

夏溪  
 琴高  
 子格  
 波同  
 葦村  
 士朗  
 一茶  
 眞一  
 塊菊  
 うねり  
 快臺

善秋

十月の歌

十月 十月やいつく〜  
 十月 十月は鳥の梅の香を〜  
 十月 十月や折〜  
 十月 十月や雪〜  
 十月 十月や陽〜  
 十月 十月や新田能〜  
 十月 十月や梅の華の序〜

眞也  
 完素  
 外六  
 卓池  
 荻帆  
 抱儀  
 昇左



十月やをすけぬけり家の内  
 十月や縄のうらまをたかむ角  
 十月や表のうらまを草のた  
 十月や物うらまを日に出せ  
 十月は照るるやねに苦  
 十月は笑ひさうめり山にあれ  
 十月は月うらまを花のまじり  
 十月は月を風の雲をまじり  
 十月は月を仙んせよ十月  
 十月は月を大松うらまを十月  
 十月は月を松の尾を十月  
 十月は月を松の尾を十月

嵐外  
 麻衣  
 茶新  
 旦松  
 南枝  
 棠立  
 其角  
 松風  
 墓村  
 治徳  
 石北

小喜

義馬一人をうらまを小喜の那  
 聖日といふ月の人をうらまを小喜の那  
 小喜りや障るおおきくをうらまを小喜の那  
 尾やくけりうらまを小喜の那  
 庭下はうらまを小喜の那  
 移りて針をうらまを小喜の那  
 十月は月をうらまを小喜の那  
 枯きくのをうらまを小喜の那  
 新部屋をうらまを小喜の那  
 静ぬのつやうらまを小喜の那  
 ちよらうらまを小喜の那

嶺山  
 二丘  
 丁丙  
 右通  
 草也  
 小松  
 麓山

終

書原石日あつてつとふれおけつらん  
 小まより中少校まをる者うり  
 寺新しとよまを皆為て小まをこれ  
 江先よ小まの元ゆまま坊の子  
 屋杯多れは清く門く小まを  
 麻子や掃階のつく小まを  
 小六月 城山子雛子出けり小六月  
 夕陽紅さるうまを——小六月  
 志し能や亦ち能集乃小六月  
 山子畑をふふあつ日小六月  
 朝夕をま——志屋の小六月

慎我 源庫 素樸 子格 蝶二 子身 山店 鬼費 子結 荳乳 糸目

達丁忌

達丁忌やわつとまを——あ味の  
 達丁忌や苦んかみの相——うり  
 達丁忌や慌惚の灯をせり——かろ  
 達丁忌や眼先よまをいものあし  
 達丁忌と中まをけり條のあ  
 達丁忌や塚と日本の國の敷  
 達丁忌や尾を先か月敷あ  
 達丁忌やわつとまを——まを  
 打毛とせ成佛とつんまをのり  
 達丁忌や其角の餅の冬牡丹  
 麻草とまを——か多りけり十二日

由誓 芦葱 社心 了智 史那 名露 仙雪 樗良 二柳 大に丸 南板

時日會やわたりたりたる後能治  
翁長や後葉のさき秋の更し  
時日會やわたりたりたるか  
雪をわたり月秋のりぬ細能日  
を世にわたりわたりぬ月明り  
を世にわたりわたりぬ十日程  
西命講酒乃やわたり海五升  
出んやわたり酒の片たり西命講  
西命講や酒の瓶をわたり  
西命講上戸も餅の一庭をわ  
わたりわたりわたりぬ日蓮忌

英 尔  
其 雅  
永 年  
一 具  
通 南  
を 世 氏  
餅 六  
高 白  
波 江  
何 之

西命講

伊 弄

茶 口 切

伊弄の節やと年替りたる井の白  
ろの節やと年中産の節海  
口切やたたり月候は小紫  
口切や臺目をと通し抄のり  
口切や講軒を賣を季か  
口切や小樽下たりたりた  
口切や血江乃其葉峰乃折  
口切や去年と去年の産のり  
口切やつりつりぬ椀のり  
口切や左引く高尾の端  
口切や第一本より二人

二 丘  
甚 村  
を 世 氏  
酒 中  
正 秀  
甚 村  
桐 峯  
小 柯  
一 具  
麓 産  
南 枝

終

初時雨

けりしうり人年ふれ初時雨  
河原を北島帽子に上り初時雨  
新や能屋板の市やまの時雨  
雪層一 松の初志くれ  
初一くれ眉子鳥帽子の雪くれ  
ひきやうの初時雨  
其染ぬぬれを初一くれ  
庭板より出ひけりし初時雨  
傘控へ蓋をまき初時雨  
降るし又ひ雪ま初時雨  
ひきやうの初時雨

去来 許六 文學 葦村 玄考 乙由 風井 後一 白代 閑更

時雨

志くれ了る初時雨  
わし初時雨西日初一くれ  
青初あしけりし初時雨  
志くれ初時雨  
あし初一四時初時雨  
片里初一初時雨  
わし初時雨  
川舟初時雨  
青初初時雨  
青初初時雨  
初時雨

梅室 庚年 双鳥 一具 右通 其山 一應 夷剛 杜彦 一映

一箇入せそやりのれのりり丹  
 活花のちあけの春や一時白  
 陰雲にさすよりあつた白が  
 高きとや庭を掃ハ掃く時  
 いづれと物より乃時白のれ  
 市人の朝山城より一はれの那  
 わつくととふれくやぬ地の才  
 志れより中一暖那め一ゆふ  
 黄多花井よりあそびとふれ那  
 風よりハ本より堂よりとふれれ  
 毎井よりとふれ一と階よりれれ

楓園  
 南枝  
 暮暮  
 露丸  
 清夜  
 芳阿  
 素樸  
 梅令  
 暮村  
 大江丸  
 士朗

萬葉

萬葉のうきとくかり流の那

近山

本景

三尺の山もあらしの本景の那

毛世法

七もさるたむさ及ぬ本景の那  
 糸産の雲もあつと本景のれ  
 世もたつれくあひ本景のれ  
 高つくと垂よひつ本景の那  
 足えと秋風の起る本景の那  
 一山乃本景の景もあつと戸はのれ  
 静もて本景のつけをたつ本景のれ  
 ちもさるハ秋よ飾りつ本景のれ  
 高つとと摘取越本景のれ

守武  
 文学  
 為有  
 流芝  
 白起  
 函流  
 朝陽  
 業  
 智見

菜大根のうへを少くは本葉の  
本葉葉ふる葉ふひるを松の月  
月の出くんきハ数やむ本葉の  
うらうらき日ありの交る本葉ハ  
市の舞は谷本葉の那  
畫法能志くく見えてちる本葉  
掃多ふぬける程も本葉のれ  
落きぬだくく新本葉のそ  
本葉くくつり本葉や坪の内  
ちりぬく葉教りく本葉のれ  
結くその葉子付く本葉の那

南 濱  
梅 室  
昇 化  
種 山  
世 岐  
子 粘  
素 柳  
蒼 帆  
而 后  
史 子  
江 三

冬本之

芥入て葉子あくくや本葉立  
本葉羽のひくくく汁も本葉立  
節子あくる葉あり本葉立  
酔く服くんきハ香味り本葉立  
家々塔うくく法む本葉り本葉立  
井戸くくく贈の葉も本葉立  
あり炬子山をくく本葉立  
本葉葉能あくく本葉り本葉立  
一林樹少くく本葉立  
控られくくその本葉り本葉立  
小休くく本葉り本葉り本葉立

芥 村  
肥 刀  
確 嶺  
色 淵  
波 回  
在 糸  
子 粘  
葉 之  
蒼 帆  
三 浦 人  
得 是

冬

さすまのちりくちり松のまなぶるも  
五ヶ所 柳田松のまなぶるも  
松のまなぶるも 起川松のまなぶるも  
笠のまなぶるも あり 松のまなぶるも  
風よ葉のまなぶるも あり 松のまなぶるも  
二村の松のまなぶるも 一軒 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 鳥の  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも

松村 碧山 小松 菊枝 角丸 葛村 古松 鳥の 玄来 文丸 一幽

松

尾

松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
一ヶ所 大松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
小口、片松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも  
松のまなぶるも 松のまなぶるも 松のまなぶるも

松 大松 柳陽 松室 小松 松村 子松 葛屋 其山 素折

枯	枯	枯	枯	枯	枯	枯	枯	枯	枯	枯	枯	枯	枯
萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩
萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩
萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩	萩

茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶



茶花をやはらかに指しあつちの火  
茶の花はやはらかに先へ寺花畑  
身と珠散るけり茶の花はけり  
茶花をやはらかにそめて病上り  
茶花をやはらかにを好む一巻の道  
茶花をやはらかに教習をぬきりけり  
茶花をやはらかに一足つて二日能多  
茶花をやはらかに三日月能多  
茶花をやはらかにぬきり古茶本  
山茶花をやはらかに送るけり寺男  
山茶花をやはらかにぬきり

浪  
東  
蝶  
子  
尾  
吳  
茶  
士  
道  
其  
住

山茶花

子考

賽縁の砂をうらむ子考  
後引の影をうらむ子考  
吹雪を清戸をうらむ子考  
芦のうらむ子考  
梅のうらむ子考  
かしのうらむ子考  
さすまて月を沈むかいつあり  
にちをうらむ子考  
海をうらむ子考  
おれをうらむ子考  
明るるをうらむ子考

一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一

鴨

鴨

秋あじや鴨の宿まゝ長柄杖  
鴨月くや弓矢を捨て十餘年  
鴨月くや風吹まをむお能面  
うらうらと白まゝとや池乃鴨  
懐心を強くして痛く鴨能宿  
強く秋まゝと秋能宿と池乃鴨  
宿まゝ長柄杖宿まゝ鴨乃宿  
日あまうらと鴨やを沈けり  
庭掃く後まじけり鴨の音  
鴨能宿まゝと出日能宿門内  
芝井へまゝと鴨や池乃鴨

正春  
去来  
百明  
金槌  
鶴駕  
鶴年  
岱雲  
菅居  
若那  
水瓢  
芝石

水鳥

水鳥や水鳥をいれと宿まゝ  
水鳥能宿まゝとぬれまゝ池乃  
水鳥能宿まゝと鴨をまゝけり  
水鳥や水鳥をいれと下まゝ  
水鳥能宿まゝとたる宿の群  
水鳥や水鳥をいれと小田能宿  
水鳥能宿まゝとあや日能宿前  
水鳥能宿まゝとのまゝとけり  
梅雲能宿まゝとやみやう能宿  
宿まゝけりまゝと時とあ能宿  
あけつとまゝと又宿まゝ

旭海  
壺天  
亭々  
東漢  
士朗  
閑更  
濱吉  
永年  
一具  
亭々  
船村

浮舟鳥

和歌集のあやうく丹や浮舟も  
 風止へ皆向ひけりうらなも  
 木名や相ひの切てる屋敷の  
 木名や形く杉はてむらた  
 木名鳴や豆粒剛と音する  
 木名形行く山を獲し跡の舟  
 木名形居る枝や相ひの竹  
 木名乃の玉舟や梅もあそひ行く  
 親父さく起るる先よみそそ  
 晩方形老や碎るみそそ  
 こそそお焼火子燃る竹戸の乳

多  
 木  
 鶴  
 鶴  
 鶴

多  
 月  
 祖  
 幻  
 露  
 竹  
 芥  
 東  
 多

十月の部

霜月 霜月の光りや月と花  
 霜月や鶴のつくくかひのそ  
 霜月形花とあそびく思ひける  
 人歌や霜月以の石二乃や生  
 霜月とあそびくあそびのそ  
 霜月とあそびく霜月そと小庭の那  
 霜月形老や居るけり云葉

交  
 為  
 百  
 其  
 梅  
 月  
 南

冬 至 昼能ひき初のうき雪冬玉のれ  
 雪能ひき初のうき雪冬玉のれ  
 公よいとくし朝日冬玉のれ  
 獅子舞の雪まわし冬玉のれ  
 鳥しうき初のうき雪冬玉のれ  
 梅側石より日能あてる冬玉のれ  
 手席より火吹休き冬玉のれ  
 井能あもけさし冬玉のれ  
 船ららるる大船のうき雪冬玉のれ  
 舟引をせし冬玉のれ  
 けりし冬玉のれ

乙物 朱拙 真室 大橋 羽人 波文 一具 船村 玉圃 吟家

吹草歌

口やきや吹草歌の海のうき  
 海山より吹草歌のうき  
 りあみんあこあやつとみん  
 里並よさ敷の瀬波やうき  
 小扇風や吹草歌のうき  
 秋神楽や鼻のうき  
 冬能あたる神楽のうき  
 古神楽や吹草歌のうき  
 秋神楽や押ぬき冬能あたる  
 我子等ら舞よき冬神楽のれ  
 冬能あたる神楽のうき

神楽 其角 一層 下風 李由 舟戸 手糖 其角 紫衣 去来 松草 梅室 由誓

里神樂 新らー 此邊おけり 里神樂  
 子ー ぬきき けれ 里神樂  
 結貨馬 教の けり 里神樂  
 世にみ けり けり 里神樂  
 へんき 教の けり 里神樂  
 舞古よ けり 言や 里神樂  
 空也忌 十と 世も 通ぬ 今も  
 新鼓 長 踊 けり 蓋 子 ぬき けり 新 叩  
 こー けり けり ぬき けり けり 新 叩  
 家 考 けり ぬき けり けり 新 叩  
 世に 中 けり ぬき けり 新 叩

其角 乙州 高白

空也忌 空也忌 空也忌 空也忌 空也忌  
 新鼓 新鼓 新鼓 新鼓 新鼓  
 こー けり けり ぬき けり けり 新 叩  
 家 考 けり ぬき けり けり 新 叩  
 世に 中 けり ぬき けり 新 叩

素樸 蕨 彦 夷 剛 蕨 了 ち 世 残 半 残 惟 然 曲 翠 交 考

水仙の影能くさる日之けり  
小堀の影上下名なり水仙也  
鶴巻の中より白く水仙也  
水仙の名なき流るく是之けり  
水仙や訓深ぬ辨は生く  
水仙や心つらく日能く  
綿子も水仙ぬく里より  
足せりてもゆく水仙の影けり  
皆嘆きけり水仙の影  
水仙や古仕合能くきり  
水仙や懐心な一月も

智月  
尚白  
露川  
子代  
嵐高  
山馬  
一具  
茶静  
三浦人  
一茶  
一糸

冬梅

雪に如く雨を南に冬梅  
家古き月夜の水さや冬梅  
雲一く交り中や冬梅  
唯土能くゆく落る冬梅  
毛布のつれなき居けり冬梅  
鴨のけりつ能く冬梅  
年少く春見え冬梅  
冬梅も冬梅も冬梅  
あけぬ冬梅も冬梅

南枝  
乙女  
芦本  
游刃  
鬼塚  
杜有  
冷美  
南枝  
寸外  
宋也  
冬梅

少くけしきし平子のこけし  
飯臺のまをそり命のれ  
常ふそくや孫ねと母の何掛け  
飯の子や何をふられたはまの  
常ふそくしと梅あましけれ飯  
飯が了り世に人をあやむる  
智若福若りのり飯とけ  
若く代々誰もくあやむは梅  
小室いよめ尺一とそり飯とけ  
それれく常ゆく飯のまをれ  
世にまをれ飯一から飯のく

其南  
永方  
斧上  
八橋  
牧者  
彦村  
大江流  
成良  
若良  
梅台  
水谷

夜半

村の子を指さく居るや夜半の鐘  
とくそく殿の威をる夜半のれ  
夜半の鐘をそり人そり網代古  
夜半それそむれく目とそり飯の  
夜半や侍のれ若とかし  
助夜半のまをそり心そり那  
夜半や先右一日たまりとそり  
夜半や亮のれそりそり免そり  
暖者あしそりそりそりそり  
古飯あしそりそりそりそり  
ゆめめそりそりそりそり

妙人  
衆翁  
李由  
曉臺  
卯七  
暮古  
丈左  
許六  
尚白  
尺素  
丹丘

追尋  
暖者

終





曳句をさつぬち能大根の乳  
 格分能雨よりりり大根引  
 ねまうて能を致たりて大根引  
 そつろりと雪を致して大根引  
 甚奥の一人を打つり此  
 手能ちのう海に根引一甚れ  
 戦う一甚きをいりて挿りて  
 ちうまはれよと思て甚ぬ安ん  
 灯うたうを居るん志甚ぬ細代也  
 宗もたうを致し出さうり守  
 宗もたう月夜よ安ぬ細代也

住年  
 子格  
 骨尺  
 南南  
 誘名  
 午代  
 唐忘  
 厚筆  
 東山  
 九起  
 ト子

網代

穀

甚奥

甚

低い枝をうりよ甚や能能  
 恒おやや能よ本権のちれつ  
 宗もたうや能ち人極う甚ぬ濱の松  
 抄もたうや能あけれ八字能宗  
 かし風より能あけれけまの宗  
 抄もたうや能は能まきさの宗  
 宗もたうや能旭のか能抄能宗  
 能ううよ宗能能宗能能能能  
 能もたうや能極能一宗の能  
 能もたうや能の能の能の能  
 能の能の能の能の能の能

梅鳥  
 抱儀  
 月庭  
 永松  
 貞山  
 船村  
 舟外  
 侍甚  
 幻芝  
 松竹  
 雪書

おね 杖

おねの杖もふこも子也ー雲の杖  
目うつりやや鶴の上る苔の雲  
風そよれやや雲もまきりーついで  
おねおやや雲もれ也種小屋  
大名も雲の風情や松花雲  
おねおそよそねのへそそ雲をば  
さそく草うさそね杖も同じ雲  
大池やまてそ新るおねおそ  
指先よおねおそそや血より  
おねおそそ雲もてー系車  
おねおそそ雲の中の雲もおねおそ

南枝  
万次  
素柳  
桃年  
朱英  
道玄  
梅室  
万和  
昇左  
右殿  
朱義

凍

霰

軒凍るひくや 凝滞る 樵杖者  
凍つけもいそつたなう 毎の風  
難吹そ 露 毳きう 軒のあられ  
老哉若と 杖やて 雲ん玉あられ  
飛うへそ 雲おあられや 雲おあ  
海へあられや 杖や 雲に 杖杖者  
はくみのおつて 月夜 杖杖者  
杖杖者よつれーあられ 杖杖者  
霧降よそり 杖杖者あられ  
杖杖者沈て 杖杖者杖杖者  
杖杖者をやて 杖杖者杖杖者

里秋  
秋切  
老松  
玄木  
文子  
其角  
杜國  
卯七  
仙砂  
梅室  
遠陽

顔出せえあられの弾く颯々  
手ひきやあられ遊ばす  
只小暇はさあやまぬ静をあられ  
松あやと降こあられや降る月  
桐挿よあられ沸いた殿の那  
眼のゆきうもまは静あられ  
か馬能尻叩きりあられう那  
あられう地旨よけりし秋明れ  
田能戸能動きまへんあられう那  
昔あはれ地まはまぬあられが  
筆かきく葉まか風のあられが

貞祇  
茨山  
由誓  
士為  
一々  
南枝  
深  
九總  
菊以  
蝶二  
菊子

雪

何ゆきのあはれまへんあられ  
けくひのあはれまへんあられ  
一松まへんあられまへんあられ  
折るや折まへんあられまへんあられ  
入おるあはれまへんあられまへんあられ  
一人つ降るあられまへんあられ  
お高まへんあられまへんあられ  
静まへんあられまへんあられ  
南力あはれまへんあられまへんあられ  
はれや雪まへんあられまへんあられ  
横合まへんあられまへんあられ

護物  
碓嶺  
竹占  
碓山  
り勢  
杜踏  
竹分  
完徳  
赤月  
助室

雪 磔

終



碓氷の舟の月おむ海走らう那  
よい月紅あおむつくや海走ら  
風台船をももよ海走の小買物  
あちくくと那橋のつらむ海走が  
ねあもあもや海走の焚き火  
うけりてあつり海走の菜とり  
刺る盤まらつ修きのほく海走の  
日紅うらよ居風おもあ海走の  
山のつら海走のえんや海走の  
もあまると柳のえんや海走の  
まともる人の眼も海走の

攸村 月庭 右瓶 大豊 伊堂 一具 南枝 城元 九起 子輅 伯遠

茶

日紅うらよ一日まきー垣のー  
月のあつとつらおくまきー舟の舟  
湯をあつと一俵まきー海走けり  
ぬけ道をあつと海走のまきー那  
燃きーもあつと火をかせまき  
たあつと子日紅うら門のまきー那  
うて居れたる居るあつとまき  
白粉の舟おあつとまきー那  
えんやそれまきー推軒のまきー那  
橋の今よまきーあつとまきー那  
家あつとまきーや山のけり

子輅 其山 一誠 梅令 文昇 井梧 標産 成員 景終 若三 乙二



焚香とけ餅とけ餅とけ餅  
おありおありおあり  
唐紙墨とけ餅とけ餅とけ餅  
空欄とけ餅とけ餅とけ餅  
下帯とけ餅とけ餅とけ餅  
け餅のけ餅とけ餅とけ餅  
錦下とけ餅とけ餅とけ餅  
扇とけ餅とけ餅とけ餅  
才徳子とけ餅とけ餅とけ餅  
何事とけ餅とけ餅とけ餅  
意とけ餅とけ餅とけ餅

香餅  
け餅  
涼菟  
石明  
木芽  
園友  
乙居  
扇后  
感雪  
菊山  
梅室

空月

空月や唐舎敷とけ餅とけ餅  
志とけ餅とけ餅とけ餅  
おありとけ餅とけ餅とけ餅  
空月や軒端とけ餅とけ餅  
空月や障子とけ餅とけ餅  
空月や籠の迹とけ餅とけ餅  
空月や木倉とけ餅とけ餅  
空月とけ餅とけ餅とけ餅  
空月とけ餅とけ餅とけ餅  
空月とけ餅とけ餅とけ餅  
空月とけ餅とけ餅とけ餅  
空月とけ餅とけ餅とけ餅

病号  
土芳  
鬼巻  
幽路  
双鳥  
籃尊  
二丘  
英秋  
其角  
之送  
后兆

炭竈

炭竈とけ餅とけ餅とけ餅  
炭竈とけ餅とけ餅とけ餅  
炭竈とけ餅とけ餅とけ餅

炭竈

炭

炭がすや唐のんくあるや煙う  
炭がすや唐のんくあるや煙う  
炭がすや唐のんくあるや煙う  
炭がすや唐のんくあるや煙う  
炭がすや唐のんくあるや煙う  
炭がすや唐のんくあるや煙う  
炭がすや唐のんくあるや煙う  
炭がすや唐のんくあるや煙う  
炭がすや唐のんくあるや煙う  
炭がすや唐のんくあるや煙う

巴人  
石  
道  
白  
庚  
一  
真  
却  
子  
任  
北

精

精の火や熱かりくくく一系内  
一里ちとんけくくく一系内  
山伏のちくくく一系内  
おく人の起く押合精火くれ  
精火くれくくく一系内  
思くくく又熱く一系内  
精火くれくくく一系内  
精の火や熱かりくく一系内  
思くくく人くくく一系内  
おくくく一系内  
精火のちくく一系内

兼人  
梅室  
月底  
休友  
麓  
二  
凡  
卓  
卓  
永



煙

作能成り浪高き津糸以て明石  
洲一きや 園煙意の是の只も煙  
庭交りてお付み出る園煙意の  
雲形もお掛子候る火桶の那  
あまのりの子をててて火桶の  
接掛も押もててて火桶の那  
猶もあてててて火桶の那  
あまのりもあててて火桶の  
甚れ候も足れ候も火桶の  
一まもてててて火桶の

言 山 一 園 扇 接 南 梯 蒼  
水 塔 首 女 和 室 村 曝 札

巨煙

孫立候もあまのりかて巨煙  
壁際も天もあまのり候も  
眼のさあて人下候もあまのり  
あまのりもあまのり候も  
二三日も川屋候もあまのり  
埋火やお壁もあまのり候も  
埋火やお人をもあまのり候も  
埋火やおついてもあまのり候も  
埋火やお真もあまのり候も  
海士も家も埋火候もあまのり  
埋火やお打もあまのり候も

翠 二 燦 舟 卓 七 許 墓 雪 蕙 白  
葉 丘 二 月 池 張 六 村 居 雨 雄

懐燈 何よりたたりての上は懐燈毎

多一燈より多うつくしの懐燈は

湯漬 湯漬うつくしの懐燈は

多人をまたねをかけた暖る

出れくるとんかきよは名敷のま

杉屋やうん本のまを敷まの似

倉 猫はまきくまうまかしの倉うれ

紙よりま屋の衣掛は度ひの舟

何よりま花のまうかり紙より海

まきくるとん本の倉ま打りり名

るま高は二人まきくまうまうれ

丁酉

英泉

涼英

丙吉

百明

乙乙

嵐雪

尚白

小春

文季

栂山

山中

文前の舟のま作やう紙巾の舟

錦帽子 遠山や後風やう紙巾の舟

足袋 ありまうま足袋やの舟よりまうれ

揚巻はや足袋まうれぬは大船持

かき足袋の四十ま足をまみぬ

よくれ足袋ぬきあり船下船の上

足袋の足袋まうれぬは船持

冬 足袋まうれぬきあり船下船の上

冬 船持はあり船かひぬきあり

冬 山 ありありありありありありあり

双鳥

旦松

全巻

毛純

赤山

嵐雪

小圃

茅村

雪清

士朗

月化

冬

雪のつらさを抱きしめたり  
明きくそ吹ぬく風やそそ山  
香しくも雪のまはるにそそ山  
雪のたよりを雪のまはるに  
赤門の音へたつとそそ山  
冬は雪の中を雪のまはるに  
冬は月よりしゆらゆらそそ山  
冬は田舎よりとそそ山  
冬は川風よりとそそ山

原山  
一峰  
蒼蕙  
魯隱  
惟州  
永葉  
月化  
沙路  
南枝  
道夫  
標卷

年杪想

去年は梅のつぼみ  
秋の葉も掃けりし  
花のまじりも梅のつぼみ  
梅のつぼみも梅のつぼみ  
出出と水は掛りし  
秋風のつぼみも梅のつぼみ  
梅のつぼみも梅のつぼみ  
のけりし梅のつぼみ  
梅のつぼみも梅のつぼみ  
梅のつぼみも梅のつぼみ  
梅のつぼみも梅のつぼみ

折居  
一香  
恒丸  
雪陽  
舟之  
軍吏  
梅令  
南枝  
北海  
其角

豆打も戸はあふかよひのきこれ  
 赤尾や極もくく鬼も来以  
 鬼もおのくくんんんんれけり  
 赤もくくいんんんけりぬ鬼もお  
 豆もくく寅や雀もあはあ  
 年哉 鳥の舌も年哉一秋うぬ  
 鳥もくく年哉さうさうりぬ  
 年秋 月能陰の常もあれを年一秋  
 赤もくく人心もくく年一秋  
 厄掛 神福の如く以中より厄掛  
 赤もくく母けり厄掛  
 一 鳥 素丸 右襪  
 鳥 雀 寸長 風調 軍更 飛翁  
 得 葦 密淵 子粒 多よあ 号阿

大中日 梅活る友も友阿り 大三十日  
 籠也も出上落也た大三十日  
 陳秋 山伏や中も赤もぬ陳秋の如く  
 一も赤り鳴る秋り一陳秋の鳥  
 梅打る鳥もや陳秋の如く家  
 赤もくく鳥秋けり陳秋の鐘  
 人もくく吹秋ぬ陳秋の風  
 居心ぬくく陳秋の鳥も赤  
 孫の子もくく陳秋の子  
 年のもくく陳秋の鳥もくく  
 黄もくく鳥もくく年のもくく  
 一 鳥 氷 氷 西 利 字 茶 梅 亮 桃 季 兔  
 鳥 士

鳥居

年終内書のりつ人かきみけり  
 去年は似く何事やらあむ年の内  
 多に世心のおやうんれをれ  
 若るもつ前よみけり年終内  
 表めらぬまゝあまひや年の内  
 乙由  
 手代

ふるんをのあきうりけこのあ  
 冬の内は深まつてあまあま  
 史際

弘文館俳書出版目録

- 繪入俳諧 **季寄手引草** 全二冊 近刻  
附發句作方指南
- 俳諧 **季寄發句獨稽古** 全二冊 實價二十錢 郵税四錢
- 俳諧 **發句五百題** 全二冊 實價拾五錢 郵税四錢
- 俳諧 **發句六百題** 全二冊 實價拾五錢 郵税四錢
- 俳諧 **發句七百題** 全二冊 實價拾五錢 郵税四錢

○俳諧發句八百題 全二冊 實價拾五錢 郵稅四錢

○俳諧發句九百題 全二冊 實價拾五錢 郵稅四錢

○俳諧發句千題集 全二冊 實價拾七錢 郵稅六錢

○俳諧發句千三百題 全二冊 實價拾七錢 郵稅六錢

○俳諧發句千五百題 全二冊 實價拾七錢 郵稅六錢

發兌書林 東京日本橋區上槓町九番地 弘文館

明治廿五年十一月一日印刷  
明治廿五年十一月 日出版

東京市日本橋區上槓町九番地

發行兼印刷者 秋元政

全所

發行元 弘文館

賣捌所 全國各書林

